

朝さろんの本棚 〈49〉

筒井康隆 『家族八景』 について

49th morning:2015年7月9日(木)@渋谷

参加者:8名

『家族八景』とは、家庭の中に他者の目線を持ち込むことで、ブラックボックスとされがちな家族の内部を暴き立て、佳き家庭という幻想を解体する試みを持った作品。

【テーマ】

〈ヒトの心理とエゴを“読む”(1)〉

- ⇒ 新シーズン:《ヒトの心理とエゴを“読む”》、筒井康隆の七瀬三部作を順に読み解いていきます。七瀬シリーズでは、三部作を通じて“自分とは何か?”という問いが投げかけられることになりま。 “SF”だからこその仕掛けにも注目しながら、永久不変の“自分とは何か?”という問いかけについて考察してもらえると、より一層楽しめるかと思ひます。今シーズンを通じて新しく考えてみようと思うのは、例えばこんなことです。
- ◇なぜ70年頃に、文学界で(大衆作家も純文学作家も)SFというジャンルがこれだけ力を持っていたのか? 時代状況ともオーバーラップさせながら、SFという方法論の持つ力(特徴)についても考えてみたい。
- ◇主人公は同じでも、三部作のなかでテーマや手法がどんどん進化していきます。それを丁寧に確認してみましょう。 そのようなテーマや手法が、作品内容とどう結びついているのか、そこにどんな必然があるのか、考えてみたいと思ひます。

【本】

『家族八景』 筒井康隆 (新潮社、1972) 文庫本:新潮文庫(1975)

【筒井康隆】

1934年9月24日生まれ。大阪府大阪市出身。動物学者の父・筒井嘉隆と母・八重の長男として誕生。1970年代からは、それまでのナンセンス、ブラックユーモアの作風に加えて様々な文体を用いた実験的な作品を発表していき、次第に熱狂的なファンを獲得していった。初期のよく知られている作品には、PTAによる悪書追放運動を批判した「くたばれPTA」や社会風刺からナンセンスな笑いを引き出した「ベトナム観光公社」、痴漢冤罪の恐怖を描いた「懲戒の部屋」などがある。1970年の第1回星雲賞を長編部門、短編部門で独占してから計8回同賞を受賞。また1968年から直木賞に3度候補として挙げられたが、受賞にはいたらなかった。筒井は後にこの経験から、作家志願者が文学賞選考委員を次々に殺していくスラップスティック作品「大いなる助走」を執筆した。1970年

の「脱走と追跡のサンバ」の発表を境に、自身の作品からは徐々に純 SF 的な作品が減少する。1972 年 4 月には東京から妻の実家に近い神戸市に転居。1973 年 8 月には SF ファングループ「ネオ・ヌル」を結成。翌年 1 月には「NULL」復刊第 1 号を発行。筒井はこの「ネオ・ヌル」グループをスタッフとして、1975 年 8 月に日本 SF 大会「SHINCON」を神戸で開催。筒井は大会名誉委員長を務めた。1977 年 7 月には「NULL」の最終号が刊行。また 1980 年には日本 SF 作家クラブの事務局長として、徳間書店を後援とした日本 SF 大賞の創設に尽力した。一方で、1971 年より純文学雑誌「海」に作品の掲載をはじめ、純文学の分野にも進出した。1978 年には大江健三郎の紹介から「海」編集長埴嘉彦の訪問を受け、中南米の文学について教示を受けるなどして大きな影響を受ける。同年、登場人物が自身を虚構内の存在だと意識しているという設定の「虚人たち」で泉鏡花文学賞を受賞。これを皮切りに実験的な作品を多数発表。また、この時期にはストレスからくる胃穿孔を起こして入院し、入院中に読んだハイデガーに影響を受けて死や別れをモチーフにした作品も増えていった。

【ストーリー】

1970 年から 1971 年にかけて「小説新潮」に掲載された 1 話完結の 8 編の短編小説からなる。主人公・火田七瀬は他人の心を読むことができる特殊能力、いわゆるテレパシーをもつ十八歳の少女である。彼女はその能力を隠すため居場所を転々としても怪しまれない家政婦をしている。うわべだけの平和が保たれている尾形家、定年退職した父を家族全員が軽蔑している桐生家など、《ホーム幻想》の崩壊が描かれていく。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう

1): 本作は八つの短編で構成されていますが、あなたが読んで一番気に入らなかった作品(もしくは気に入った作品)はどれでしたか? その作品のどんなところが気に入らなかったか(あるいは気に入ったか)教えてください。

* 第2話(澱の呪縛)。ドギツ過ぎる。他人の家に感じる独特の臭いをモチーフにしているのはよくわかるが、単に悪臭として表現されていて汚らしい。

* 第2話(澱の呪縛)。強烈な悪臭というのが、生理的に受け付けられない。

* 第4話(水蜜桃)。七瀬に迫ってくる一家の主が気持ち悪い。漏れてくる思考内容が特に自分勝手に気持ち悪い。

* 第6話(芝生は緑)。七瀬が他人の心に実験をしかけているところが嫌だ。

* 第7話(日曜画家)。男性の本能がギラギラしている。基本的に全話がそうで、一面的な理解だと感じる。

* どれも嫌だ。どの作品にもグロテスクな笑いが籠められていて、好きになれない。

2): 本作品の最大の特徴は「ひとの心が読める能力」という超現実的(SF 的)な設定を導入しながら

も、それ以外の描写はリアリズムに徹している点にあると思いますが、そのことは、この作品にどんな効果をもたらしていると思われましたか？

* 下部の各作品詳細のなかで詳述して掲載。

3): 本作は、“(あなたの考える)優れた文学”に値する作品でしょうか？

* 七瀬のテレパスのような能力は本来の人間にはできないこと。だからふつうは「できないから、想像して補うようにしている」。しかしそれができてしまう七瀬には「ひとの気持ちを想像する」必要がない。でもテレパスを備えた七瀬も万能ではなく、「七瀬なりのできないこと」を抱え、それに向き合っていく点、その結果七瀬がどうしているかを読み解いていくのは面白い

* 18 歳～20 歳くらいの多感な少女がテレパスであることの苦勞、人生を知ってしまい希望を持ってなくなる苦勞が興味深い。知らない方がいいのにと思いながら、まともに受けたら嫌になってしまうだろう様子をつぶさに追体験できた。

* 七瀬は勉強ができる、その向学心や頭の良さは持って生まれたものであるかもしれないが、それ以上にテレパスという境遇が必然的に求めた渴望、生存のための本能のような悲壮さを感じさせる。第 1 話では、他人の心は読めるが「自分が読まれるかもしれない」という感覚を持っていない、ある種の無防備な様子が読み取れるのでは？

* 七瀬が「可愛い」という設定に違和感。最初は家族を眺める(日陰の)家政婦さんで面白く読んでいたのが、だんだんと前面に出て来たのが不満だった。観察者という立場に留まり続けなかった背景が気になる。

* さすがに40年以上前の作品で古臭さを感じた。死者の意識を追体験している話ではすごく迫ってくるものがあって衝撃があった。各タイトルが内容を上手に言い当てていて、整っていてすごい。

【解題】 『家族八景』という作品について

●各編における構成

| | タイトル | あらすじ | 七瀬の動向 |
|---|------|---|---|
| 1 | 無風地帯 | 七瀬が家事手伝いとして遣わされたのは、夫婦と子供二人と、一見平凡な核家族。七瀬は『テレパス』の能力を使い、彼らの思念を覗き見る。温かい家族関係の裏側では、冷えた悪 | 家政婦≡ 観察者 という基本的な立場に留まる。しかし、奥さんがテレパスであるかもしれないという疑念を最後に覚えるが、そこは 観察者でありながら観察しきれていない 七瀬の未熟ぶりと共に、謎のまま残される。一方、 自分以外のテレパスの存在 を予感させる |

| | | | |
|---|-------------|--|---|
| | | 態と罵倒が飛び交っていた。 | 話。 |
| 2 | <u>澱の呪縛</u> | 大家族の元にやってきた七瀬は、家に充満した『悪臭』を絶つべく掃除をする。大家族は清潔になった家を見て、自身の不潔さを自覚する。そして、家に清潔をもたらした七瀬に敵意を抱き……。 | 引き続き観察者のポジション。家政婦としての本分から一家の住人のために徹底した掃除を行って各人が隠したてていた悪癖や汚物を暴き立ててしまうことになる。結果、羞恥心や猜疑心が出てきて家庭はギスギスし、七瀬は〈悪意〉を買ってしまい、露骨に 邪魔者視 されてしまった。 |
| 3 | <u>青春讃歌</u> | 若作りに勤しむ妻と、それを情けない行為だと罵る夫。二人の口論は苛烈さを増し、冷徹な夫の言葉が妻の心を深く傷つける。翌日、スポーツカーを高速道路で走らせる妻の意識を、七瀬はテレパスで追っていたが……。 | 〈家〉に使える家政婦という立場でありながら、自分の 感情に捕らわれてしまい 妻の側に加担してしまう。それが、 妻が事故で死亡する結果を招く遠因 となってしまう。七瀬はその死の瞬間をテレパスし、 死の瞬間を追体験するという罰(?) を味わった。 〈七瀬は寿郎の抱いている 強烈なエディプス・コンプレックス に気が付いた〉〈寿郎が、それほど「中年にふさわしい服装」にこだわる裏には、陽子に対する 批判の裏づけ といった理由以外の 潜在意識 が何らかの形で働いている筈だった〉。 |
| 4 | <u>水蜜桃</u> | 男は定年退職を機に社会との接点を失い、家族からは疎まれる日々。彼の興味は地味ながらも美しい家事手伝い、七瀬に向いた。息子夫婦が旅行に出かけたある日の夜、性欲を滾らせた男は、七瀬に宛てがわれた寝室に忍び寄る。 | 観察者の立場にあった七瀬が、欲望の対象としてまなざされる⇒ 被観察者の立場へと転倒 。 「さとる」「山父」という民間伝承と自分を比較する。主人から自分の身を守るために、 主体的にテレパスの能力を行使する 。〈自分の超能力のことを知っているただひとり人間であるというだけの理由で、 どんなことがあっても抹殺しなければならない存在 だった〉〈 保身のため、やむなく勝美の精神を圧殺する 〉〈 彼女の犠牲者 〉。 生きるためには抹殺しなければならない「 宿命 」。 自己防衛のための攻撃的能力行使(1回目) |
| 5 | <u>紅蓮菩薩</u> | 心理学を専門とする助教授の夫と、良妻賢母を自負する妻。夫は女学生と浮気し、妻はそれを察しながらも、気づかない振り。ある日、助教授は七瀬の珍しい苗字『火田』が、かつて超能力実験で高成績を残した男・火田精一郎と、同じだと気づき……。 | 七瀬の父・ 火田精一郎 と新三が研究生時代に師事した 樺島教授 の間には超心理学をめぐるある実験があったことが語られる。そのことで七瀬の身に危険が及ぶ。実験は7年前。その2年後に樺島教授は死亡(〈5年前 急死 していた〉)。火田精一郎は実験の5年後に死亡(〈一昨年、わたしが高校を卒業する前の年に)〉)という出来事が明らかになる。〈 実験が中断したの |

| | | | |
|---|-------------|--|---|
| | | | <p>は、樺島教授の急死が原因だった〉。</p> <p>〈なぜ自分は、こんなに苦しまなければならないのだろう、なぜこんなひどい罵倒を甘んじて受けなければならないのか〉〈生まれてはじめて七瀬は、自分の能力を心の底から呪い、憎んだ〉〈新三の手を封じるためには、彼に自分のことを忘れさせるほどの大きな、手に負えない厄介ごとをあたえればよい〉</p> <p>生きるためには抹殺しなければならない「宿命」。 自己防衛のための攻撃的能力行使(2回目)</p> |
| 6 | <u>芝生は縁</u> | <p>やり手で亭主関白の夫と、おっとりしていて気弱な妻。医者で穏やかな気性の夫と、頭の回転が早く勝ち気な妻。彼らは自分の配偶者に欠けているものを、別の夫婦に見つけていた。七瀬は、同時に二組が浮気するように画策するが……。</p> | <p>これまでのテレパスとして見聞きした経験から〈単に十九歳の少女の潔癖さ以上のものが七瀬の超自我には強固に形成されていたのである〉。〈いうまでもなく彼女の超自我は常人と違っていた〉。その結果、二つの家庭の人間に心理的な実験(操作)を行った。〈彼女の倫理にとって、正常な人間たちの「願望」と「実行」の間には大きな隔たりを認めることができなかった〉(p178)。能力の行使に対する躊躇いが緩くなっている。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>〈負けたわ、と、七瀬は感じた。〉〈中年の無意識的な狡猾さに負けたのだわ〉。</p> <p>七瀬の倫理感が常人とは異なる様子が語られる。その倫理観は、殺人に至る能力行使を含む、テレパスであるという事実によって影響・形成されたもの。テレパスとしての行動が、自分の意識を常人と違うものへと変性させてしまった(?)</p> |
| 7 | <u>日曜画家</u> | <p>平日は会社勤め、休日は油絵を描く日曜画家の男。彼の妻と息子は、彼に『売れる絵』を描くように焚きつける。七星は彼の心を覗き見て、彼が自分を傷つける他者を『抽象化』していることを知る。</p> | <p>〈いやな人間の思考に対して七瀬の方から挑みかけたのはそれがはじめてだった〉〈自分がはじめて好感を持つことのできる天洲という人物にめぐり会ったせいではないだろうか〉。</p> <p>結局は七瀬がこれまで見知って来たようなエゴイスティックな人間であった天洲も、心理が抽象画に変換されていたためにテレパス能力でも見抜くことが出来な</p> |

| | | | |
|---|-------------|---|--|
| | | | <p>かった。</p> <p>騙されたという恨みからか、天洲の毒牙にかけられそうな落合多加子をテレパス能力で知りえた情報を伝えることで、窮地から救う。はじめて能力を善的に行使(人助け)した。しかし動機は…?</p> |
| 8 | <u>亡母湯仰</u> | <p>母の葬儀の場で、息子は年甲斐もなく咽び泣き、弔問客の失笑を買っていた。彼女の病床の世話をしていた七瀬も葬儀に参列していたが、葬儀中、誰のものとも知れない『呪いの声』を耳にする。</p> | <p>〈常に彼をなぐさめ、彼に自信を植えつけてくれた恒子は、信太朗にとって彼の自我の一部であり、超自我でもあった〉という設定が登場。〈(あなたが死なない限り息子さんは駄目になるのよ) (死んであげて) (息子さんのために) (死んであげて)〉。</p> <p>〈なんのために今まで精神感應能力をひた隠しにしてきたの〉〈わたしは知らない、わたしは何も知らないのだ〉。〈自分の身を守るために生きている人間を見殺しにするという大それた行為への罪悪感は、彼女の心から消えることがない筈だった。心に神を持たない七瀬だったが、自らが神にかわるほどの存在でないことはわかっていた〉。</p> <p>自分しか彼女を救えないという倫理的葛藤。しかし自分の防衛・生存を選択する。</p> |

⇒八つの家庭の個性的な問題を観察したり、巻き込まれたりする七瀬という表面的なストーリーを縦軸に、連作を通して年齢的・肉体的に成長していき、能力者としての様々な試練や葛藤を経験していく様子が、本作の横軸となって展開していくのが本作の特徴と言える。

⇒作中では、テレパス能力の行使は倫理的にどう許容できるか、原理的には倫理に反するはずの殺人(抹殺)が、それでもなお能力の行使が許されるとするならそのときの「条件」とはなにか、という問題を投げかけられる。単に超現実的な能力が描かれるだけでなく、そのような能力が存在する時に生じるであろう諸問題が見過ごされることなく、丁寧に煩悶される作品でもある。

◇第二作『七瀬ふたたび』との関連

本書のうち特に、「水蜜桃」での自己防衛のための能力行使＝殺人(精神破壊)、そして「紅蓮菩薩」での親子二世代に渡る、能力者とそれを駆る存在との戦い。テレパスという超能力を持つ存在の業と宿命を巡るこの二編は特に、サイキック・ウォーズ的な様相を帯びる第二作へと展開していく契機を秘めている(映画「X-MEN」のようなテーマが絡む)。

◇第三作『エディプスの恋人』との関連

「青春賛歌」と「亡母渴仰」の二編には〈エディプス・コンプレックス〉が共通するモチーフとして登場する。このモチーフは、より根源的な問いと共に、第三作「エディプスの恋人」において反復的に物語られることへと繋がっていく。

●作品成立の時代背景

1954年(昭和29年)12月から1973年(昭和48年)11月のオイルショックに至るまでの約19年間の“高度経済成長”が時代背景としてある。この期間には各家庭で「三種の神器」が持て囃され、「一億総中流」意識が浸透し、都心部における核家族化と家庭経済の平均化が進み、定着していった。つまり、「一般大衆」とその「家庭」が共通の理想として浸透していった。一方で、プレモダンな旧華族階級は没落あるいは世相の中に解体していき、世間一般からは忘れ去られるようにもなった。

本作は、そのような、時代に取り残された旧家などを舞台に、家政婦という前時代的な存在を観察する他人として潜り込ませることによって、総中流化し理想化された「都心の核家族家庭」を哄笑のうちに揶揄する視点を含む、一種の同時代批評でもある。

●当時の文学研究の世界での筒井評価

〈(八十年代頃までの間)近代文学研究者の過半数は、筒井康隆を読んでいなかった。特に中高年層では、読んでいるほうが例外的だった。それはある程度予測していたことだが、問題はなぜ“読んでいない”かという理由だ。整理してみると、ほぼ三つのタイプに分けることができた。

まず第一のタイプはきわめて単純で、読む機会がなかったというものだ(…)。第二のタイプは、要するに“流行作家”だから読まないという、一種の自己規制のようなもので、このタイプの人々は、同じ理由で五木寛之や渡辺淳一や村上春樹も読まないのだ。そして第三のタイプは、筒井康隆の作品がSFとかギャグとかスラプスティックとかいった、えたいの知れない不まじめなものの寄せ集めであって、“人生いかに生きべきか”というテーマをもたない無意味なものであるらしいと予想し、その偏見によって忌避している人々のようだった。

よく考えてみるとこの三つのタイプには共通点があって、いずれも文学あるいは研究における“制度”というものに拘束されている。第一のタイプはかなり無意識的な拘束と言えるが、第三のタイプともなると、まことに強固に自己の中に“制度”を構築してしまっている。つまり、近代文学研究者の多くが筒井康隆を読んでいなかったということは、筒井康隆を“制度”内の作家として認めていない研究者がそれだけ多い、ということの意味するらしい。

*

社会が幻想であるという想定は、個人が幻想であるという認識を核としていた。人物は、夢や深層心理の人格的な実現として造型されており、そうした人物の相互の関係が、社会的行為を代行していた。ある面において、それは安部公房や福永武彦の試みとも通底していたけれど、ある特定の観念を容認するような不徹底なものでなはかった。そもそも、社会とか個人とか言ったとらえ方は皆無で、

発想の根本が違っていた。

こうした認識に基づいて、どんな聖域も構えないという徹底したパロディやギャグが紡ぎ出されていた。小説や詩歌のパラダイムも完全に解体され、それどころか、ことばそれ自体がみごとに分解されてしまっていた。そして SF 的手法とつながる時間・空間の概念の解体もあった。

要するにそこでは、すべてのパラダイムが解体され、崩壊させられていたのだ。そしてその崩壊の底から、人間存在というものの根源的な不安と、それを包む巨大な哄笑とが湧き上がっていたのである。日本の近代文学に対する私の狭い経験の範囲内ではあるが、“**文学**”にはこんなことまでできるのかという畏怖に似た感覚を、初めて私は抱いた。>

(「筒井康隆・人と作品」柘植光彦(1988) より)

●筒井康隆の作家的影響

〈夢〉を現実と等価値のものとして物語を展開していく作風はユング・フロイトら心理学の影響を大きく受けている。『海』の編集者の埴嘉彦によって中南米文学に出会い、マルケスやリョサ、コルタサルらの文学にふれる。この刺激は「虚人たち」成立の源となる。イーグルトンやフォーコー、ジュネット、バルト、ソシュールらの理論が作品に採り入れられている。演劇・音楽との関わりは幼少時より強く、独特のリズム感など筒井文学の作風に関わる。特に自身ドラムスやクラリネットの奏者であるジャズへの関心は『ジャズ小説』などに結実している。

●七瀬シリーズについて

『家族八景』は直木賞候補作。七瀬が精神感応能力者、予知能力者、^{サイコキネズ}念動力の持ち主、^{タイム}時間旅行者^{トラベラー}などほかの超能力者と出会い、暗黒組織と闘いを繰り広げる『七瀬ふたたび』(新潮社、1975)、全知全能の超絶者によって七瀬が息子の恋人に選び出される『エディプスの恋人』(新潮社、1977)と続く七瀬三部作の第一作。平岡正明はこの三部作の構想を<家族・国家・神>ととらえている。主人公を精神感応能力者に設定することによって、一般家庭の日常に潜む人間心理の醜悪さが露呈され、それが八つの家庭の景色として描かれる。筆致はコミカルだが、精神状態に異常を来した人間や死を迎えた人間といった極めて特異な心理描写に迫力がある。

【まとめ】

筒井康隆の作品の特徴としてよく指摘されるのが、<SF><ギャグ><スラップスティック><グロテスクな笑い>といったものです。これは解説にもあるとおり、個人、家族、社会的常識、通俗的な価値観、国家、神仏、などといったあらゆる対象をすべて等価に、作品執筆の対象として徹底的に解体・滑稽化してみせるだけの胆力と筆力があるからこそ、できることでもあります。また筒井は<言葉>や<(人間の)思考>といったカタチを持たないものまでも、疑ってかかります。筒井作品には安全

圏というものが無いのです。

このように紹介してただけでは、ピンと来ないのも無理ないかもしれません。ですから今シーズン、一緒に“七瀬三部作”を読み解いていこうと思います。第二作、第三作と併せて読むことによって、筒井作品に寄せられる評価がだんだん実感としてわかるかもしれません。けれどそれは決して、筒井作品を礼賛しましょう、ということではありません。むしろ、このような指摘を踏まえた上で、丸っきり新鮮な目でひとりひとりがそれぞれ独自に、筒井作品を鑑賞・評価してみてもどんな景色が見えてくるだろうかということに他なりません。完結編ではそのような試みもしてみようと思います。

※参考文献

- ・『新研究資料 現代日本文学 第2巻』(明治書院、2000)
- ・『昭和文学全集 第29巻』(小学館、1988)
- ・『本の森の狩人』筒井康隆(岩波新書、1993)
- ・『現代批評理論のすべて』大橋洋一(新書館、2006)
- ・『小説の技巧』デイヴィッド・ロッジ(白水社)
- ・〈小説『七瀬三部作』暴かれる人間心理 最低で最高の読後感〉
<http://reco.mayokore.org/post-569/>
- ・〈七瀬三部作「家族八景」〉
<http://www.7se-themovie.jp/>

テーマ 《ヒトの心理とエゴを“読む”》

シーズン第2回: 8月20日(#50) 『七瀬、ふたたび』筒井康隆(新潮文庫)

シーズン第3回: 9月10日(#51) 『エディプスの恋人』筒井康隆(新潮文庫)

